

「主婦の在宅」

1999.12.15 放送

ブルース・L・バートン

早いもので、今年も後わずかとなりました。この時期なると、新しい年に対する期待とともに、過ぎ去っていく年に対する色々な思いが心の中から浮かんでくるものです。1999年は視聴者の皆さんにとってはどのような一年間だったのでしょうか？

私は今年、日本社会を考える絶好のチャンスに恵まれました。勤務先の大学から、研究休暇というものを受け、今年の4月から一年間、今までの研究成果をまとめるために、授業など、大学の直接的な業務が免除され、比較的自由に時間を使う機会を得ました。

私の専門領域は日本史研究ですが、休暇の間、そうした専門的な研究を進める一方で、余裕のあるときは、周りの社会を観察したり、または家事や育児にも力を入れました。

私は以前からまったく家事をやっていなかったわけではないのですが、結局は、大多数の男性と同様、多くの時間を自分の仕事や人との付き合いに費やし、たまに時間があると、子供と遊んだり、掃除や買い物の手伝いをする程度の家事にしか参加していませんでした。

しかしながら、もう少し本格的に取り組んでみたら、今までしてきたことは、一般の主婦が毎日やりこなしていることのほんの一部にすぎない、ということがよく分かりました。家事に関して言えば、主婦は毎日、洗濯、掃除、買い物、料理、皿洗いなどはしなければなりませんし、週に何回かは必ず銀行や郵便局に行ったり、その他の用事も出てきます。また、育児に関しても、子供が小さいうちは多くの時間がかかり、肉体的に大変ですが、少し大きくなったかと思ったら、今度は神経が磨り減らされることも多く、なかなか楽になりません。

私が今年、このように大変な家事や育児に積極的に参加して痛感したのは、日本の社会は、依然として、専業主婦の存在を前提として成り立っているということです。言い換えれば、2、30年前の家族のありかたが、社会の仕組みのなかにそのままの形で化石化されてしまっています。最近、家族のありかたそのものが大幅に変わってきているにもかかわらず、社会制度はその変化に追いつかず、現実と制度との間に大きなギャップが広がっているのではないかと感じます。

その昔、例えば60、70年代の高度経済成長期の日本では、男性たちは毎朝早く会社に行き、夜遅くまで帰宅しませんでした。その間、主婦たちは家を守り、家事や育児に専念していました。男女関係は、よく言えば一種の分業体制、悪く言えば、具現された性差別そのものでしたが、いずれにしても、当時の社会はそれなりに効率よく動いていました。

ところが今は、事情がかなり異なってきています。男性たちは依然として外でよく働きますが、女性たちは、家庭の中だけでなく、社会の色々なところでも活躍するようになってきています。結婚しても、仕事を続けたい人も大勢いますし、逆に専業主婦をしたく

でも、経済的な理由で仕事をしなければならない人もいます。こうした理由から共稼ぎの方が増える一方で、離婚やその他の原因で片親しかいない家庭も増えています。その反面、子供のいない夫婦や最初から結婚しない人も多くなってきています。

要するに、日本の家族は、この10数年で大変多様化してきているわけです。男は外で働き、女は子供と一緒に家にいるというパターンはもはや過去のものとなりつつあります。

では先ほど触れた現実と制度のギャップとは具体的にどのようなことでしょうか？ここでまず取り上げたいのは、日本の教育制度についてです。私自身が教育者なので、こういった問題に少し過敏すぎるのかもしれませんが、例えば、こういうことが気になります。

まずは、皆さんもよくご存知の連絡網。連絡網は学校と家庭を結ぶ大事な役割を果たしていますが、同時に、誰か、具体的には母親が、常に家で「待機」していることを前提にした制度でもあるように思えます。余程緊急な用事ではないかぎり、プリントに載せ、子供に持たせたほうが、多くの家庭は助かるのではないのでしょうか。

次は、保護者会や個人面談などの学校行事です。名前こそ「保護者会」で、「母親の会」ではありませんが、多少の例外を除いては、専業主婦しか行けない時間帯に設定されており、実質的に母親しか出席していないことが多いのです。私もこの4月からは保護者会によく出席しましたが、他の父親に会ったことはほとんどありませんでした。さらに実際には、最近仕事やパートなどを行っている母親が多いので、保護者会の出席率自体は決してよくありません。こうした学校行事をせめて夕方か週末に行ってもらえるとありがたいのですが、これは無理なことなのでしょうか。

次に、学校のために用意しなければならないものが少し多すぎるように思われます。何日までに何々を用意して子供に持たせて下さいという話が、よくプリントや連絡網で回ってきますが、個人的には、多少お金がかかっても、なるべく学校の方で一括して用意してもらえればと思います。特にたいへんなのは何と言ってもお弁当です。私立の学校ならまだ話が分かりますが、私の長男が行っている公立の中学校でも毎日お弁当が必要です。共稼ぎやシングルマザーなどが増えてきている今日この頃ですから、給食のほうが多くの方でいいのではないかと思うのですが、実際には給食どころか、お弁当を持ってこなかった子供のための売店すらありません。こういったことには理解しがたいものがあります。

このように日本の学校は、制度的に社会の変化に追いついていないところが少なからずありますが、残念ながらこうした問題は、学校だけではなく社会のあらゆるところに見いだせます。時間がないので詳しく説明できませんが、例えば、郵便局や市役所などはなぜ平日の限られた時間しか開いていないのか？店で買った家具や電気製品の配達はなぜ時間の指定ができないのか？病院はなぜ患者にとって便利な予約制を導入しようとならないのか。

もちろん、こうしたサービスを提供している組織や会社で働く人たちの都合も考えなければなりませんが、どちらかというと、サービスを受ける側の市民の都合が大事ではないのでしょうか？このように考えると、諸悪の根源は、日本社会の仕組みが一般人や消費者の都合ではなく、供給側の組織の都合に合わせて出来ているということではないかと思われ

ます。

もちろん中には評価できる組織もあります。例えば日本の銀行はその昔はなはだ不便なところでしたが、最近では、現金自動支払機の利用時間の拡大や、インターネット経由のオンライン・バンキングの導入などでようやく先進国並に客のニーズに合わせようとしています。しかしこれはあくまでも例外です。

この一年、いつになく家事と育児に励んできた私の結論は、稼ぎ手の父親と専業主婦の母親という昔ながらの家族像に合わない人たちにとっては、日本の社会は、まだまだ不便で冷たいところがあるということです。改善を望む次第でございます。

それでは。